

このたび、東北・北陸地方にて大雨による災害に遭われた方々に、心よりお見舞い申し上げます。

現在会員登録数 3,857 人さま。次号は 9 月 21 日発行の予定です／

＋----- ◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■-----■
【1】お知らせ

● IICLO オンライン講座 I 「授業に役立つ！子どもの文学5つのレッスン」
第4回「あまんきみこを読み直す②「ちいちゃんのかげおくり」の配信を開始
しました。後半には発展読書案内もあります。

◎講師：土居安子（当財団総括専門員）

◎視聴料：1300 円 ◎対象：子どもの本に関心のある方ならどなたでも

※お申し込み（Peatix）→ <https://iicloonline1-4.peatix.com>

◇全5回のうち、第1回、第3回、第4回を配信中です。内容、詳細は ↓↓
http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#iicloonline1

● 「おはなしモノレール」参加者募集

貸切の大阪モノレール車内で「おはなし会」を楽しみ、彩都の会場で「パネルシアター」を観ていただくお子様向けのイベントです。5歳から小学3年生までのお子様と保護者、あわせて120人を募集します。今年の定員は例年の半分にしています。開催は9月19日（月・祝）、参加費はひとり500円（大人・子ども同額）です。申込締切は9月1日（木）。詳細は↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/01_kids/index.html#ohanashimonorail

● 「第39回 日産 童話と絵本のグランプリ」作品募集

詳細は↓↓

http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/02_nissan/index.html#39boshu

● 研究紀要の原稿募集

当財団では「大阪国際児童文学振興財団 研究紀要」第36号の原稿を募集しています。応募締切は10月31日（月）です。詳細は↓↓

http://www.iiclo.or.jp/06_res-pub/04_journal/boshu.html

● 寄付金を募集しています

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable → <https://syncable.biz/associate/19800701/>

● YouTube「大阪国際児童文学振興財団 公式チャンネル IICLO」

<https://www.youtube.com/channel/UCgPj7D2ReQ0J03zhMMLfuIA>

公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/m1_youtube/index.html

● 当財団公式 Twitter → https://twitter.com/IICLO_News

■ ----- ■
【 2 】 コラム
■ ----- ■

《 1 》この本読んだ？ Yasuko's & Masayo's Talk

『風さわぐ北のまちから 少女と家族の引き揚げ回想記』 遠藤みえ子/著
石井勉/絵 佼成出版社2022年6月 対象年齢：小学校高学年以上

* 今回のゲストは愛知淑徳大学の酒井晶代さん（M）です。

* 作品の結末まで書かれています。

あらすじ：朝鮮半島に住んでいた11歳のれい子の家族（母、兄、弟、妹3人、父は出征）が敗戦を迎え、半島北部の鎮南浦でソ連兵と同じ家に住んだり、朝鮮人の家に住まわせてもらったりしながら、引き揚げを待ち、何とか日本に帰ってくるまでを描いた実話。一連の体験を著者の姉、れい子の視点から描いている。

Y：著者は当時、5歳。実際に体験したことと言っても、事情がわからなかったり、覚えていなかったりする中で、お母さんに直接質問したり、手紙のやりとりをしたりすることでこの作品が書かれました（「おわりに」による）。

M：そのためか、読者も歴史的な状況を頭に入れながら読み進めることができ、わかりやすくなっていると思いました。

Y：『1945年 鎮南浦の冬を越えて 少女と家族の引き揚げ回想録』（長崎出版 2012年1月）を改稿したと末尾に書かれています、かなり変更されています。本書の方が、れい子の統一した視点かつ、時系列で読み通すことができ、まとまりを感じました。

M：誰一人命を落とすことなく、倉敷へ帰ってきたとき、同じ村の人たちが「奇跡じゃ」と言いますが、本当に奇跡的なことだったと思いました。冒頭から結末まで、いつ命を落としてもおかしくない状況の繰り返しで、幸運が重なって全員が帰国できたことがわかります。

Y：それは、日本が虐げてきた朝鮮半島の人々の助けによってでした。キムさんは、自分が親日との理由で投獄されながらも、れい子たち家族にたきぎなど、冬を越すための貴重なものをもたらしてくれます。れい子の父がキムさんの息子たちの先生だったという儒教的理由からでした。

M：そして、ソ連の将校に家を追い出されたときに助けてくれたのは、向かいのピルヒのオモニでした。ピルヒは友だちであるれい子たちが来ることを歓迎しますが、ピルヒの姉はれい子たちに冷たい態度をとります。オモニが助けてくれたのは、「隣人を愛せよ」というキリスト教の教えによってであることがあとでわかります。

Y：キムさんやピルヒのオモニがれい子の家族を助けたのは、戦争中のれい子の両親の、現地の人に対する姿勢がかかわっていたのではないかということが読み取れます。

それから、れい子たちを追い出したソ連の将校の場面は、実話だからこそのおもしろさがありました。

M：一緒に住んでいるときは、共用するトイレで鉢合わせになったり、クリスマスにその将校がれい子の妹の房子が熱を出して苦しそうにしているのを知って、鼻水を吸い上げてくれたり、一方で、日本人の女性を連れ込んだり、敵だから悪者とは割り切れない描写がリアルに感じました。

また、れい子の視点から描いているせいか、れい子、みえ子、文子、房子の四人姉妹の日常もおもしろかったです。

Y：特に、しっかり者のれい子と引っ込み思案だけれど観察力に優れたみえ子（＝著者）の性格の違いは際立っていました。

M：敗戦後も続いた戦争を伝える貴重な資料かつ、子ども向けの読物が出版されたことをうれしく思いました。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第84回「十六日」

飛び込んできた声

前回の「泉ある家」（当メルマガ NO.143）につづいて、小説的な作品を取り上げます。タイトルの「十六日」というのは盆の十六日、ことしなら、今週の火曜日にあたります。書き出しは、こうです。

くよくよく晴れて前の谷川もいつもとまるでちがって楽しくごろごろ鳴った。盆の十六日なので鉢山も休んで給料は呉れ畑の仕事も一段落ついて今日こそ一日そこらの木やとうもろこしを吹く風も家のなかの煙に射す青い光の棒もみんな二人のものだった。)

「二人」というのは、この小屋で暮らす嘉吉とおみち、いっしょになって3年になるけれど、まだ子どもはないのです。めったにない骨休みの日、嘉吉は、屋近くまで寝ています。おみちは、膳のしたくをして待っています。ようやく起き出した嘉吉とおみちが膳（味のちがう三つの餅です）にむかったとき、河岸でカーンカーンと岩をたたく音がして、やがて、門口から「若い水々しい声」が飛び込んできます。――「今日はちょっとお訪ねいたしますが」

声の主は、かばんをもって、鉄鎚をさげた学生でした。仙台の大学で地質学を勉強していて、化石をさがしに来たようです。嘉吉は、いっしょに地図を見て、道案内をしてやり、おみちは、学生にも膳をすすめます。学生は、お礼に敷島（紙巻きたばこの銘柄）を一つとキャラメルの小さな箱を置いて、また足早に出ていきます。

学生が飛び込んできたことが、夫婦のあいだに小さな波紋を起こします。学生が去ったあと、おみちは、「娘のような顔いろでまだぼんやりしたように」座っています。嘉吉は、おみちが学生に心をひかれたのかと考えて、かっとなります。嘉吉は怒鳴り、おみちは泣き出します。せっかくの一日が台無しです。それでも、いくつかのやりとりのあと、おみちは、「何云うべ この人あ、人ばがにして、」とさわやかに笑い、嘉吉も、「ごろりと寝そべって天井を見な

がら」何べんも笑うのです。

作品のおしまいは、こうです。——「キャラメルと敷島は秋らしい日光のなかにしずかに横たわった。」キャラメルをおみち、敷島を嘉吉として、「きわめて象徴的に爽やかなエロスの匂いをさせて結ばれている。」とする意見がありますが(山本早苗「十六日」考 1979年)、どうでしょう。「泉ある家」も合わせて、賢治の小説的な作品に人物の心理を描くモチーフを見るのは伊藤眞一郎です(「宮沢賢治の小説的作品について」1975年)。伊藤は、「十六日」には嘉吉の感情の起伏を読んでいます。(馬車別当)

(本文の引用は、筑摩書房刊『宮沢賢治コレクション2 注文の多い料理店』によりました。)

《3》子どもの本の珠玉のことば 38

と、もうすこしで手がとどころと思うころ、三ちゃんのからだ、クルリとねじれて中心をうしなっただけで、そのまま、まるで鳥のはねみたいに着物をひろげてすーっと下へおちていった。

(「タカの巣とり」『とらちゃんの日記』 p.51 千葉省三/作 岩波少年文庫 岩波書店 1960年6月初版、引用は1971年10月第14刷から)

小学校の夏休みに、「日記」というタイトルに惹かれて読み、自分の生活とはまったく違うけれど、子どもの気持ちのよくわかる人の作品だなと思った記憶があります。何度か読み直していますが、今回また読んで、ある出来事が起こることによって、これまで見ていた風景がまったく異なって見えるという場面が特に心に残りました。

引用の場面は、5人の子どもが「村のわかいしゅ」に知られないように、タカの巣をとりにいく場面です。小さい杉からタカの巣があるボタン杉にのりうたって、のぼっていき、三ちゃんがタカの巣を見つけたと言って巣の方に近づいていき、木から落ちてしまいます。

タカの巣を見つけた三ちゃんのことを少しうらやましく思いながら見守っていた子どもたちは、三ちゃんが木から落ちた瞬間、「だれも、声ひとつたてないで、ぼんやりとそれを見ていた。そのうちに、気がつく、みんな真っ青になってしまった。」とあり、それから、大慌てで木をすべりおりて、三ちゃんを探します。

同じような展開は、とらちゃんが、源ちゃんをつきとばしたら、源ちゃんが鎌をふみつけて血を出した場面(「とらちゃんの日記」)や、じぞうさまに妹のよだれかけをあげていいことをしたと思っていた「おれ」が、母親に「死んだ子のこんだぞ。あんなことして、おやすが死ぎでもしたら、どうする気だ!」と言われて今までの気持ちがひっくり返ってしまったりする場面(「じぞうさま」)などでも見られます。

方言が全体のトーンを作っています。そして、登場人物が一部重複しながらも、異なる子どもの視点から村の日常の体験が短編として重ねられて一つの

世界を作り上げており、その構成を興味深く読んだ記憶も残っています。(Y)

《4》 行って来ました！

あべのハルカス美術館で9月4日まで開催されている「出版 120 周年 ピーターラビット展」に行ってきました。ビアトリクス・ポター（1866-1943）による「ピーターラビット」シリーズ最初の絵本『ピーターラビットのおはなし』の出版 120 周年を祝って、ピーターラビットの誕生日前夜から今日に至るまでを振り返る展示です。原画やスケッチ、書簡、出版された本、グリーティングカード、人形など約 170 点が展示されています。

ビアトリクスが5歳の男の子のお見舞いに送った、ピーターラビットの元となる絵手紙の直筆オリジナルは日本初公開だそうです。ピーターラビット誕生以前に挿絵画家として描いたウサギを擬人化したグリーティングカードも展示されていました。ウサギは擬人化されていますが、しぐさや表情、動作はウサギそのものです。また、飼っていたウサギをモデルに描いた、さまざまなポーズや場面のスケッチや水彩画などもありました。

『ピーターラビットのおはなし』のカラーの原画は、初版が出版されるときに採用されなかったり、削除されたりした挿絵も、すべて展示されていて、お話を追ってたっぷり楽しめます。シリーズのほかのお話の手書き草稿ノートなどもありました。

ピーターラビットのグッズもたくさん紹介されていました。ビアトリクスは、百貨店で売られた粗悪なピーターのぬいぐるみが不満で、自ら型紙を作って人形を完成させ、特許登録をしたそうで、1905年に作られたピーターのぬいぐるみが展示されていました。絵本のキャラクターを商品化するために特許を取得した最初の人だそうです。1919年頃に販売された「ピーターラビットの追いかっこゲーム」というボードゲームは、「ピーターラビット」シリーズに出てくる、あひるのジマイマやかえるのジェレミーなどをかたどった鉛製の駒がとてかわいくて、ゲームをしてみたいと思いました。

ピーターラビットが日本で最初に紹介された『日本農業雑誌』（日就社）の「お伽小説：悪戯な小兎」（1906年）や、『幼年の友』（実業之日本社）の「ピーターロー兎」（1915年）なども展示されていて、日本でも長く愛されているのだなと思いました。(K)

あべのハルカス美術館 <https://www.aham.jp/>

■ ----- ■
【3】全国のイベント紹介
■ ----- ■

- 2022 イタリア・ポローニャ国際絵本原画展
会 期：8月13日(土)～9月25日(日) 水曜休館
時 間：10:00～17:00
場 所：西宮市大谷記念美術館（兵庫県西宮市）
料 金：有料
主 催：西宮市大谷記念美術館/(一社)日本国際児童図書評議会 (JBBY)

● 萩尾望都 S F 原画展 宇宙にあそび、異世界にはばたく
会 期：9月9日(金)～19日(月・祝) 会期中無休
時 間：10：00～20：00
場 所：あべのハルカス近鉄本店（大阪市）
料 金：有料 ※小学生以下無料
主 催：萩尾望都 S F 原画展実行委員会

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベントの開催内容が変更される可能性があります。最新情報は主催者へお問い合わせください

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■
【4】プレゼント

■ ----- ■
今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『風さわぐ北のまちから』をプレゼントします。ご希望の方は、メールで件名「メルマガ NO.144 プレゼント希望」とし、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ

office@iiclo.or.jp にお送りください。

締切は9月12日(月)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

—「—」—「—」—「—」—「—」—「—」—
8月も終盤になると思い出すのは夏休みの宿題。最後の追い込みに明け暮れたことや、大好きだったけど、時に厳しかった先生を思い出します。最近の学校の中には、ほとんど宿題がなかったり、宿題の採点を保護者が担うところもあったりするとのこと。どんな夏休みが子どもにとって幸せなのか、考える私の夏休みでした。(T A)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメルマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/m1_magazine/index.html パソコンからどうぞ

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp
